

〈書評〉

大村泉 編著

「唯物史観と新 MEGA 版『ドイツ・イデオロギー』」

(社会評論社, 2018年, 研究版)

保 住 敏 彦

By Ohmura Izumi's compiled book.
Historical materialism and “Deutsche Ideologie”
of New MEGA Edition
(Social Review Company 2018)

Hozumi, Toshihiko

1. 本書の主張点。

本書の第一部において、大村は以下のような見解を表明した。ひとつは、かれが同書の第一部で説明したドイツの研究者（フーブマン、ローザ・ルクセンブルク財団代表アレックス・デロヴィッチ、ヴィンフリード・デミロヴィッチ、タンガ・フィライシス）の評価についてである。「これらの草稿は、ヘーゲル左派への批判から若きマルクス、エンゲルスが、自分たちの思想の提出への努力の表れではあるが、唯物史観のような思想は、まだ提出されていない」という低い評価であった。

2. これに比べて本書の第二部における日本人研究者（大村、渋谷、渡邊）のでの新MEGA版I/5の内容に関する評価の特徴は、高いものであった。まず第5章、第6章、第7章においては、唯物史観の成立に関しては、エンゲルスではなく、マルクスに功績があるという大村および渋谷の見解が述べられている。その際、マルクスのMG原典にあった渋谷と大村の評価では、そこでの『ドイツ・イデオロギー』は、廣松渉の主張するようにエンゲルスの執筆したものではなく、マルクス口述によるエンゲルスの筆記であると結論づけている。廣松はアドラツキー版の原典を利用しているが、渋谷、大村は新MEGAの手書きの原典を利用できているというのが、その根拠の一つである。

わたしもアムステルダムでヒルファディングのカウツキー宛の書簡を研究した経験があるが、欧米人の手書きの草稿は読みにくいものである。しかも、悪筆で有名なマルクスの書は難しい。エンゲルスが代筆したという予想は成り立つ。

3. 最後に、新MEGA版I/5の思想的内容についての評価である。基本的な見解は、最初は左派ヘーゲ主義の影響下に、労働疎外論から出発したが、それに継続して、物象化論にうつり、最後に、唯物史観に到達したという主張である。したがって、マルクス主義の基本思想は、1842年から1845年までに完成したという評価に立っている。

4. こうした評価について、どのように批評すればよいのか、本書の叙述にしたがって検討したい。

まず、大村は明言していないが、本書の一つの結論として、ドイツ人研究者たちの新MEGA版I/5の内容の評価について、非常に低く評価しているということが言える。その原因などについては検討していない。しかし、第二部における日本人研究者の当該草稿についての研究から、そこでの労働疎外論から物象化論、唯物史観までの把握があったという評価に比べると、第一部のドイツ人研究者への把握は低いと思う。

第5章においては、渋谷は「廣松渉の唯物史観発見におけるエンゲルス主導説を根本から批判した」。その論拠は詳しいが、原典を点検できないものにとってはわかりにくい。

第7章では渡辺が、マルクス社会理論の生成を『経済学・哲学手稿』と『ドイツ・イデオロギ』との接合問題と捉え、論じている。渡邊の説明は、これまで読まれてきていない資料も読み込み、詳細である。しかし、同氏が大村や渋谷と同様に新 MEGA 版の原典を読んだうえで、本稿を執筆しているかどうかは不明である。伝統的なマルクス思想の研究を踏まえていることは疑いえないのであるが。渡邊によると、「唯物史観を構成する核心的テーゼは、最初期に芽生えた土台＝上部構造論（イデオロギ批判）の拡張と、続く『経済学・哲学手稿』で確立した歴史変革理論（共産主義論）の適用に基づく、先行歴史段階説の批判的再構成にある」と考えるのである。この整合的な説明の持つ問題点については、後に検討しよう。

第8章では、イデオロギ批判は、何時、如何にして成立したのかという視点のもとに、MEGA I/5 解題に対する異論が論じられている。この章が、本書の第一部のドイツ人研究者の解題への批判であるかどうかは、のちに検討したい。

本書の内容の重要問題について、いくつか論じてみたい、そのうち、わたしの重要と思われる思想のひとつは、マルクスが1844年2月末に『独仏年誌』の第一～第二分冊合併号はパリで刊行された。ここにはマルクスが書いた『ユダヤ人問題によせて』および『ヘーゲル法哲学批判序説』が掲載されている。また、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』が掲載されている。

ところで、『ユダヤ人問題によせて』の重要性は、そこでマルクスはこれまでのドイツ人の歴史的な活動は、ルター時代の精神的な革新運動、イギリスおよびフランスの啓蒙主義と市民革命の社会運動に比べて、いつも精神のなかでの運動であり、現実的な社会変革には至らなかった。いわば心の中

での運動に過ぎなかったと自己批判する。18世紀末から19世紀前半のドイツ哲学においても観念の世界での革新であり、現実世界への影響は少なかったと考える。これに比べると、イギリス、フランスの歴史においては、啓蒙主義思想と市民革命によって、現実世界の変革がなされた。しかし、その変革においては、旧体制の封建制と身分制度を変革し、四民平等の政治革命を実現したにすぎなかった。国民の政治的平等を実現し、市民社会を実現したにすぎなかった。

しかし、この社会にあつて、ユダヤ人の置かれた状態は、キリスト教徒である他の国民とは異なっていた。ユダヤ人は、宗教的理由により、土地、家屋の取得が困難であり、教授、弁護士、等々の仕事に就くことが困難であった。そこで、金融業などの金銭獲得的な仕事に就くことがおこった。かれらは、そうした差別のなかで、キリスト教徒のように国民国家における市民の政治的自立の権利を与えられず、このためもっと深刻な解放を求めざるを得なかった。

マルクスは、このユダヤ人の果たさざるをえない、人間的、社会的解放に、最高の解放の姿を見て認め、プロレタリアートの解放の姿とも見なしたのである。ユダヤ人という社会的に最低の位置に置かれたものの解放から、資本・賃労働の階級に置かれているプロレタリアートの解放の姿を読み取ったのである。

(同時期に書かれた『ヘーゲル法哲学批判序説』では、ヘーゲルの『法哲学』の中の国家について論じている。ヘーゲルの市民社会の矛盾を国家によって解決するという理論の中で、実は君主制の擁護を行っているという問題を論じたものである。その初期マルクス思想の展開のなかでの意義を論じる必要を感じている。)

ところで、仲正の『マルクス入門講義』(作品社2020)において、マルクスの著作の解説が試みられている。非常に詳細に、同書のテキストを検討している。しかし、詳細に逐語的に検討することにより、同書の内容把握は進

展する。本書においても、マルクスはイギリス、フランスの市民革命に比べてのドイツの状況を説明すること、およびヘーゲルの『法哲学』の内容紹介から始めている。ドイツの状況の特徴について、『ユダヤ人問題によせて』の把握と類似の説明がある。すなわち、ドイツでは現実の革命行動ではなく、思想家や哲学者の観念の中で、社会革命の姿が表明されている。ルターは農民戦争のなかでミュンツァーに代表された農民の要求を支持したが、やがてプロテスタントの領主、貴族の側に立って、農民を抑圧する。これに対して、18世紀末から19世紀初頭に、英仏の市民革命に影響された、ドイツ古典哲学の哲学者たち、例えばヘーゲルは『法哲学』の中で、国民の権利の説明から、家族や市民生活での市民の行動の様子をへて、国家による「欲求の体系」としての市民生活の矛盾の解決の努力について論じる。国家は個人と市民の矛盾を解決するものとされた。ここにおいても、哲学者の観念のなかで社会問題は解決されている。こうした英仏に比べてのドイツの観念的な水準が問題となろう。こうした水準のために、ドイツでは1848年の欧州の社会革命の波の際に、プロイセンをはじめとする領主、貴族の勢力によって、ドイツのフランクフルトにおける自由主義的運動は破綻させられる。このように、ドイツの市民革命を目指す運動は、プロイセンを中心とする封建貴族によって、破綻させられた。かれらの運動は、観念のままにとどまらざるを得なかったのである。

ところで、『ヘーゲル法哲学批判序説』について、論ずべきなのは、本書の第二部「オーサーシップ、草稿編訳をめぐる論争」における日本人研究者による新 MEGA 版 I/5 に対する評価について、検討する問題である。第5章「唯物史観の第一発見者」（大村泉）の主張点は、第1章の執筆者をエンゲルスとする説（廣松渉説）とマルクス、エンゲルス共同執筆説を退け、マルクス口述によるエンゲルス執筆説を主張する説である。この主張は、渋谷によって、すでに語られていた。渋谷はその論拠について詳しい説明を行っ

ている。しかし、その説明は複雑でわかりにくい。

私も、アムステルダム国際社会問題研究所において、ヒルファディングのカウツキー宛の書簡を読み、『金融資本論』の成立史を解明したことがあり、欧米人の手稿を解読することの困難性は、理解できる。まして、悪筆で有名なマルクスの手稿を読んで解明することの困難は理解できる。渋谷の見解の正しさを信じたい。大村が同じ見解になったのは、彼自身が新MEGA版I/5に直接検討しているからであると思う。

では、第6章における渡邊の報告の主張点はどうであったのか。

第7章 マルクス社会理論の生成 —『経済学哲学手稿』と『ドイツ・イデオロギー』の接合—

この章において、渡邊は初期マルクスの古典として知られる『経済学・哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』とを研究し、そこにおける人間疎外論から唯物史観の発見の過程を詳しく論じている。渡邊によると、「唯物史観を構成する核心的テーゼは、最初期に芽生えた土台＝上部構造論（イデオロギー批判）の拡張と、続く『経済学・哲学手稿』で確立した歴史変革論（共産主義論）の適用に基づく、先行歴史段階説の批判的再構成にあると考えることが可能だ」という。さらに、「マルクス社会理論の生成を把握するためには、これらの論文・草稿など——とくに『経哲手稿』と草稿『ドイツ・イデオロギー』を、細部の差異はあれ、連続性において考察することが肝要である」（p. 173）と論じている。この著者による考察の視角に、問題がありはしないだろうか。というのも、上記の二つの著作は、異なった問題を取り上げているのに、それらを連続性において論じるというのは、偏った解釈を可能にするからである。そうした疑問を抱かせながらも、渡邊は両者の接合についての論点をこう設定する。第一は「土台と上部構造」論、（イデオロギー論を含む）、第二は「市民社会概念の変容」、第三は疎外論と物象化論、第四は変革理論（共産主義）、第五は歴史理論の構想、等々。……本章ではこれらを全体として考察することによって、〔マルクス、エンゲルスの〕社

会理論の形成に迫りたい (pp. 173-174)。

これらのマルクス社会理論の形成を解明したいという渡邊の意欲は評価したいが、先ほど述べたような疑問がある。

その一つは、(土台と上部構造)(イデオロギー論を含む)という問題の意味である。渡邊は別の個所で、(土台＝上部構造)と述べてもいる。マルクス解釈においては、通常は土台は市民社会の経済的関係を示し、上部構造はそれによって規定される政治、文化、宗教などの現象と捉えられる。もちろん、同じ市民社会の現象として、上部構造が土台に影響を及ぼすこともある。しかし、基本的に二つは別の内実を持っている。渡邊は、こうした土台と上部構造の概念的区別ができていないのではないだろうか。

もう一つの問題は、『経哲手稿』と『ドイツ・イデオロギー』とを連続したものと捉えるという視角の問題である。もちろん、マルクスという同一人物の別の著作であるから、連続性はあるだろう。しかし、同じ人物の著作であっても、内容が変化する場合もある。渡邊の見解を探ろう。渡邊は、土台＝上部構造論、市民社会概念の変容、疎外論、変革理論(共産主義)などの多くの論点において、『経哲手稿』と草稿『ドイツ・イデオロギー』は、本質的に接合が可能であり、マルクス主義社会理論は、このレベルにおいて把握されねばならないと、結論づけている。この渡邊の評価をつぎに検討してみたい。

渡邊の分析は、彼自身が設定したとおり整然となされている。また、マルクスの研究に従って、多くの新たな参考資料を発見し、それらを検討している。とりわけ、ブルーノー・パウアーおよびマックス・シュティルナーとの対決から、マルクスの歴史把握が進展したと論じている。渡邊はドイツ人の新 MEGA 版 I/5 は、アーノルド・ルーゲやマックス・シュティルナーへの批判からマルクス初期思想は生じてきたと指摘している。ところが、本書第二部における初期マルクスの第二部における初期マルクスの分析の結果によると、ルーゲやシュティルナーのヘーゲル批判はマルクスの初期思想や唯物

史観の形成には有用ではなかった。ヘーゲル左派のヘーゲル批判とは無関係に唯物史観は成立したと論じている。大村は、第二部第1章では、ドイツ・イデオロギーからマルクス初期思想は成立したと見なしており、ルーゲやシュティルナーのヘーゲル批判とは無関係に唯物史観は成立したと論じている。これに反して、渡邊は第7章では、初期マルクスが、ルーゲやシュティルナーなどのヘーゲル左派の理論家の研究から唯物史観と共産主義を成立させていると見ているが、第8章の結論では、ルーゲやシュティルナーなどのヘーゲル左派の研究から、マルクスが唯物史観を形成したと論じることを否定している。それでは、いったいどのようにして、マルクス、エンゲルスによる唯物史観形成を説明するのであろうか。

マルクス、エンゲルスは、フォイエルバッハによる宗教批判から出発した。フォイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach 1804~1872) は、主著『キリスト教の本質』Das Wesen des Christentums (1841) はマルクス、エンゲルスに影響を及ぼした。人間のキリスト教の神への崇拜に対抗して、神の本質は人間の本質にあると見抜き、神への崇拜を否定した。こうして、神への崇拜ではなく、人間世界の研究が始まり、これがマルクス主義の社会運動に対する理解の鍵となり、唯物史観に導いたと思われる。したがって、フォイエルバッハによる神の支配の否定を介して、マルクス、エンゲルスは、人間世界と社会運動を正面から研究することができるようになり、唯物史観に接近することができたのである。

もちろん、人間と社会の運動の考察から、唯物史観という歴史観に到達することも困難であり、かれらはいくつかの研究を経て、それに到達したのであろう。わたしの現在の能力では、その実相に到達することは難しい。マルクス、エンゲルスの当時の社会についての研究を検討する必要があるだろう。また、かれらが検討せざるをえなかった、当時のヘーゲル左派の論客、たとえば、ブルーノー・バウアーなどの思想を検討する必要があるだろう。バウアーは、人間の自己疎外論について研究し、自己疎外問題を通じて、人

間社会の普遍的な特徴を解明しようとした。かれにとっては労働者の労働の疎外という特別な問題は、問題にならなかった。この点で、マルクス、エンゲルスとは、問題意識が異なっていた。こうした問題意識の相違を解明し、バウアーとマルクス、エンゲルスを区別する必要がある。この問題点については、今回のこの書評においては、これ以上おこなうことができない。もっと詳細な研究が必要であるから。

次に解明すべき問題は、一つは大村が提唱している、マルクスの唯物史観における、英仏の啓蒙思想と市民革命に対する否定的な態度である。この評価をどう評価するのかという問題である。いま一つの問題は、大村、渋谷、渡邊に共通して見られる見解であるがマルクスを重視し、エンゲルスを低く評価する態度についてである。確かに、エンゲルスはマルクスに比べて理論や思想の叙述において弱体である。しかし、ヨーロッパの諸国におけるマルクス主義の普及、ロシアのプレハーノフ、オーストリアのヴィクトル・アドラー、ドイツのカール・カウツキーやエドアルト・ベルンシュタインなどの指導者を養成したという功績がある。エンゲルスは多様な外国語を使用することができたと評価されている。これを通じて、マルクス主義の理論と実践をヨーロッパ各国に普及することができた。こうしたエンゲルスの実践について評価しなおす必要があると思われる。

第7章 マルクス社会理論の生成 において、渡邊は「マルクス社会理論を把握するためには、これらの論文・草稿など——とくに『経哲手稿』と草稿『ドイツ・イデオロギ』を、細部の相違あれ、連続性において考察することが肝要であると論じている。この主張に示されるように、初期マルクスの主要著作である『経哲手稿』と『ドイツ・イデオロギ』を統一的に把握し、連続的に考察することが必要と論じることを主張することによって、その時期のマルクスの思想の変遷が捉えられなくなっている。

とりわけ、看過できないのは、渡邊の市民革命およびそれを準備したイギリスおよびフランスの啓蒙主義思想に対する否定である。たとえば、渡邊は

「マルクスは従来のあらゆる啓蒙主義的理論構成を破棄した。」(p. 179) と断定している。

イギリスとフランスの啓蒙思想を論じたホブズ (Thomas Hobbes, 『リヴァイアサン』 (1651) を執筆)。John Locke 1632-1704 (イギリスの哲学者, 『人間知性論』 (1689) を執筆。イギリス名誉革命を導いた)。彼の見解は、三権分立論であり、議会、政府、司法の同権を主張した。また、経済分野における人々の自由な経済活動のみとめた。Voltaire フランスの啓蒙思想家 (1694~1778)。著作は哲学、詩、戯曲、批評、歴史、小説、書簡など。1726年~28年のイギリス滞在後、『哲学書簡』 *Lettres philosophiques ou lettres anglaises* (1734) でイギリス経験論をフランスに導入した。また、Montesquieu (1689~1755) はイギリスでジョン・ロック、アイザック・ニュートンを知り、イギリス哲学研究をおこなう。『法の精神』 (1748) で法の原理を実証的に研究。かれの三権分立論はフランス革命やアメリカ憲法に影響を及ぼした。フランスの政治社会を批判した『ベルシャ人の手紙』 (1721) や『ローマ盛衰原因論』 (1734) を執筆した。このようにイギリスおよびフランスの啓蒙思想家は、これらの国における市民革命を引き起こしたのであり、封建制度もとの身分的差別を克服した近代社会の出発がなされたのである。

この啓蒙思想と市民革命を学ばなければ、社会の近代化は進まない。今日の生活において、「国民の自由が必要だ」とか、「四民平等の制度が必要だ」とか、「外国人に自国の国民の自由が奪われるのは嫌だ」とかいう発言がなされるのは、この自由と民主主義への要求に基づいている。マルクス主義は、資本家階級と労働者階級の階級差別の廃止を求めたが、そのことはこうした啓蒙主義と市民革命の成果を認めたうえでの話ではなかったのか。この点について、深刻に反省してほしい。

いま一つ、論及したいのは、エンゲルスのマルクス主義運動における意義についてである。エンゲルスは、マルクスより年下であり、紡績業を営んで

いた父親の希望により、大学には進学せず、ブレーメンやマンチェスターで、父親の工場で働いた。

しかし、ベルリンでの2年間の大学聴講により、ドイツ古典哲学に通じていた。また、かれはおおくの外国語に通曉し、ヨーロッパの各国の労働運動に関与できた。その結果、かれはロシアの Georgi Valentinovich Plekhanov (1856～1918) ロシアの革命思想家。ロシアにおけるマルクス主義の先駆者として、その普及活動に努め、「労働解放団」(1883)を創設した。その後、レーニンらのボルシェビキ派と対立し、10月革命には反対した。

Karl Johann Kautsky (1854～1938) ドイツの社会主義者。ドイツ社会民主党の理論機関誌『ノイエ・ツァイト』の編集長を務めた。また、ドイツ社会民主党の「エルフルト綱領」(1891)の理論部分を起草。マルクス主義を受けついで、修正主義者を批判したが、第一次大戦参戦支持などで、徐々に中間派に移行し、ロシア革命に際してはこれを批判した。ロシアの後進性のゆえに社会主義革命には適さないと考えたせいであった。ナチスの政権獲得(1932)後、亡命した。著作は、『農業問題』(1899)や『エルフルト綱領』(1891)などである。

ロシアのプレハーノフや、オーストリアのヴィクトール・アドラー (Viktor Adler) (1852～1918) 等を指導し、ロシアやオーストリアの労働運動のおおくの潮流を統合し、第一次大戦の終了時まで、オーストリア社会民主党に影響を及ぼした。また、第二インターナショナルにおけるドイツ社会民主党の力量の大きさによって、第二インターナショナルの指導部を通じて、世界中の労働運動に影響を及ぼした。とすると、マルクス主義における資本論研究や物象化論の研究などの分野では、エンゲルスはマルクスにははるかに及ばなかったが、マルクス主義の社会運動におけるエンゲルスの役割は、大きかったと見なければならぬ。それは、ドイツ社会民主党が当時のヨーロッパ諸国の最大の社会民主党であったことに由来すると思われる。と

ところで、エンゲルスの活動には、ドイツ第二帝政時代の19世紀後半におけるビスマルクの開始した国会におけるドイツ社会民主党の、第一党への進出が背景として存在する。中央党（これは今日のキリスト教民主党）は、その当時、すでに、第二政党であった。こうして、ドイツ第二帝政時代、1860年代にはすでに、ヴァイマル共和国の議会制共和国の原型が成立していたのであった。

ところで、第二部の第6章における、渡邊の初期マルクスの研究には、見落とすことのできない功績がある。それは、マルクスの歴史研究において、当時の歴史研究の新たな成果を取り入れたことである。これまでの初期マルクス研究で取り上げられなかったいくつかの書物を取り上げ、これがマルクスの唯物史観に取り上げられている事情を明らかにしている。こうした新たな研究を行ったことは、渡邊の研究の大きな成果と認めなければならない。また、第二部の第1章における渋谷の研究において、草稿をマルクス口述によるエンゲルス筆記説は、従来の廣松によるエンゲルスによる論文という説を覆すものである。

これも新説として検討されるべき説だと思われる。

By Ohmura Izumi's compiled book.
Historical materialism and “Deutsche Ideologie”
of New MEGA Edition
(Social Review Company 2018)

Hozumi, Toshihiko

abstract

A summary of my book review on Professor Ichimura's “Ohmura Izumi's Book on Historical Materialism and “Deutsche Ideology” from Marx's and Engels' Text” He explained at first the text of analysis about Marx's and Engels' original text. And then, he explained three Japanese researchers. They are said Professor Shibuya, Professor Ohmura, and Professor Watanabe. They criticized the assessment of European researchers They could not set a high valuation of these young Engels' and Marx's.

Text about these Period (1842–1850). They assessed these texts could not explain the Marxian thinking such as a historical materialism. But Japanese scholars are said as Professors Mr. Shibuya, Mr. Ohmura and Mr. Watanabe. They thought these texts had also good meditations on historical materialism and the thoughts of “Deutsche Ideology”. Ohmura acknowledged the criticism of Japanese Researchers.

I would like to explain this Watanabe's research and his conclusions about Marx's and Engels' thought of this time. I would like to assert that Watanabe better assertion of this time was not good. I point out that he could not taken the importance of the philosophy of Enlightenment thinker and Civil revolutions of England and France. He said that Marxism denied the Enlightenment.

But I think to enlarge this thought through social exchange. Also I would like to insist that the thought and movement of, such as Karl Kautsky, Eduard Bernstein, Victor Adler, Plehanov. Engels has contributed to enlarge the Marxism in society. In this point, Engels was very important in European societies. On the 1848, he was the revolutionary of German revolution and 1850er he became a leader of German parliamentary democracy. Engels was also socially and politically, very important. Watanabe should have to know these importance of Engels.